
人の心の中がよめちゃう！？

hana

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人の心の中がよめちゃう！？

【Nコード】

N1065B

【作者名】

hana

【あらすじ】

ごく普通の高校生。だがある事件から人の心の中が読めるようになってしまった、愛美。ラヴコメ？のちょっと切な系・ちょっとおもしろい小説に仕上げたいとおもいます！

ブログ

皆さんはじめまして！

私こはし小橋 愛美まなみっていいます！

平凡な高校１年生って言いたいところなんだけど・・・。

私ある日事件があり、人の心がよめるようになったんです！

人の心が読めるようになってから早一周年・・・。

もー。皆いいかげんなこと思っているわ！

最近、ちよつと大変なことは、やつぱり心の中を読めるってことを皆にばれないようにするって事かな？

だって、怒りをしずめるって大変なことなのよ？

じゃあ、そろそろ、本文ははじめます！

うーん。初めは私が人の心がよめるようになったちゃった事件の話からしようかな？

じゃーね！

プロローグ（後書き）

こんにちは！

はじめましての方もいらっしゃるのかな？

これからも頑張りますのでよろしくおねがいします！

衝突事故！？

衝突事故！？

愛美（以下愛）「ふー。やっと授業が終わった。」

初めまして！私小橋 愛美っています！

ごく普通の高校1年生。

奈津美（以下奈）「おつかれー。ねー。愛美！今日ちょっと寄り道しちゃうない？」

この女の子は、鈴木奈津美。（すずき なつみ）私と同じ高校1年生で大大親友！

愛「いいよー。どこ行く？」

奈「前新しいお店ができて、彼と行くのにどういうところか下調べに行きたいんだけど・・・。」

愛「（そっかー。もう奈津美彼氏いるんだっけ。）私の大親友のためにその買い物付き合ってあげましょう！」

奈「愛美！ありがとー！」

奈津美は愛美の手を握り抱きしめた。

愛「もー。そんなことしなくてもいいよー。」

そうこの買い物で愛美は普通ではなくなってしまったのだ。

カラン店

愛「案外良いところじゃない！ここならあの人と行っても別に大丈夫だよ。」

奈「うん！ここにしようかな？」

愛「ここにしなよ。奈津美。」

と・そのとき

？「あー！バカ愛美だ！」

ビシッ！

愛「誰が「バカ愛美」だって？良介。」

愛美のパンチがちょうど顔にヒットした。

良介（以下良）「ほんとの事言っただけだろ？なのにパンチするなんてヒデー奴だな。」

こいつは西崎^{にしざき} 良介^{りょうすけ}私と同じ高校1年生で、サイテーなやつ。でもそんな良介のことが最近気になり始めている。

もう少し素直になろうって思っているんだけど。なかなかそれができないんだな！。

愛「それは逆でしょ？私がバカじゃなくてあんたがバカなの！」

良「お前。いったな！俺はバカじゃねー！」

愛「あんたがきずいてないだけじゃないの？どこからどう見てもあんたはバカよ！ね！奈津美？」

奈「へ？（急に話を私に振らないでよ。）……………」

奈津美は愛美に話を急に振られてパニック状態になっている。

良「ほら！奈津美だって、何も言えなくなってるじゃねーか。」

愛「わかった！もういいよ。奈津美まで私の敵になるんだったら……………」

愛美は涙を目にいつぱいためて奈津美と良介を睨んで、走っていった。

奈「ま・愛美！待って！」

ガシッ

良介は奈津美の肩を掴んで言った。

良「今は、あいつの事ほっとけ。泣いてるときはそつとしいたほうがいい。」

奈「（やっぱり、良介君って愛美のことが好きなのね。）うん。わかった。」

すると良介は笑顔になっていった。

良「愛美には秘密にしとけよ。俺がこんなこと言っただなんて言ったら、「ウソー！」って返されるに決まってるんだからよ。」

奈「うん。わかった。でも、これだけは答えてくれる？愛美の事好

き？」

良「ははは。なに言ってるんだ。そんなこと……」

良介は、笑ってごまかそうとしたが、できなかった。

なぜなら奈津美の顔を見て本気なんだとわかったからだ。

良「ああ。俺はあいつのことが好きだ。でも、あいつの態度見てたら、やっぱり俺は嫌われてんだな。」

奈「そんなことないよ。嫌ってるより、愛美は良介君のこと好きなんじゃないかな？」

良「どうしてだ？」

奈「女の勘ってものよ。」

良「そうか。ありがとな！」

良介は、走って帰ってしまった。

奈「分かるに決まってるでしょ？私は人の心の中が読めちゃうんだから……」

そのころ愛美は小さな公園にいた。

愛「なによ2人して……」

愛美は小さい公園を後にして、信号が青だったので渡った。
しかし。

ひゅー。どーん！

愛美は信号無視の車にぶつかり倒れてしまった。

キーーーーーー！

信号無視の車はそのまま走って行ってしまった。

そっぴいゆるひき逃げというものだ。

通行人A「だ・誰か、誰か救急車と警察を！」

通行人B「はい！わかりました！」

そして数十分後救急車と警察が来て、愛美は救急車に運ばれていった。

衝突事故！？（後書き）

今日2度目の投稿です。

あ・コナンの小説も入れたら3度目か。

もー。楽しく書いています。

自己満足つてものですかね？

そんな私にお付き合いくださる方はこれからもよろしく願いします！

病院！？（前編）（前書き）

黒鉄 翼さん小説のアドバイスありがとうございます。
なるべく気をつけて書いてみたつもりですがどうですかね？

前話のあらすじ

愛美は奈津美の買い物に付き合っていた。
しかしそこで良介が現れ、愛美はなつみ・良介と喧嘩してしまった。
しかし愛美は、信号無視の車にはねられ、事故ってしまった。

病院！？（前編）

病院！？（前編）

ここは愛美が運ばれたランラン病院。

愛美は生徒手帳を持っていたため、親と連絡をとる事ができた。

r u u u u u u u ガチャ

「はい、小橋ですけど。どちらさまですか？」

「ランラン病院の大村といいます。」

「びよ・病院が何のようですか？」

「実は、お宅の娘さんが事故におわれまして……。」

「え！？ウソ……。」

ガチャ

愛美の母・美恵は、あまりの急に電話を切ってしまった。

小橋宅

まだ美恵は電話の前で呆然としていた。

「いつまでも立ってても何にもならないわね。まず主人……。」

それからいつも仲良くしてくれている奈津美ちゃんと良介君に連絡とらなきゃ」

一応ここで愛美の家族のことを説明しとこう。

愛美の家族は母、父、愛美である。

そう、愛美は一人っ子なのだ。

話を戻そう。

「えーと、主人の電話番号は……。○○○-○○○○-○○○○。っと」

ピッポッパッポ

r u u u u u u u

ガチャ

「おい、美恵！仕事中は電話してくんなって言っただろ？」

愛美の父・健太は仕事中に電話してきたので少し怒り気味だ。

「そんなこと言ってる場合じゃないわよ！愛美が・愛美が今事故にあって、病院にいるって……。」

「な・なんだって!？」

健太はもうそこが仕事場だということも忘れて、電話をしながら出て行った。

仕事場の人たちが注目していたというのは、言うまでもないだろう。

「い・今ランラン病院にいるって……。」

「ランラン病院だな？」

「ええ」

「今から向かうから、お前も行け！」

「私は、奈津美ちゃんと良介君に電話をしてから行くわ」

「ああ、わかった。じゃあな！」

「ええ」

ガチャ

なんだかんだ言っても健太も美恵も良介と奈津美のことを信頼しているのだ。

「えーと、まず、良介君に電話しなくちゃね。」

ピッポッパッポ

ruuuuuuuuu

ガチャ

「はい、」

「あ・良介君？」

「あ・おばさん。どうしたんですか？」

「あのね、今愛美が病院にいるらしいの。」

「え？」

「だから良介君も一緒に来てくれる？」

「は・はい。わかりました。今行きます。」

ガチャ

やはり、良介も電話の前に立ち尽くして、しばらくの間動けなかった。

「次は奈津美ちゃんね。」
ピッポッパッポ

r u u u u u u u ガチャ

「はい、もしもし」

「あ・奈津美ちゃん？」

「あ・愛美のお母さん。どうしたんですか？」

「あ・あのね、今愛美が病院にいるらしいのよ。」

「う・ウソ。わ・私のせいだ。ど・どうしよう」

奈津美は電話してることも気にせずわんわん泣き出してしまった。

「な・奈津美ちゃん？」

美恵の声を聞いて奈津美はやっと電話していることを思い出したようだ。

「ま・愛美のお母さん……。ま・愛美が怪我したのは私のせいなんです。ヒック……。」

「詳しいことは後で話してくれればいいから、今来てくれるかしら？」

「は・はい。わかりました。今行きます。」

「ええわかったわ。」

ガチャ

奈津美は美恵に行くとはいったものの、しばらくの間泣いていた。

病院！？（前編）（後書き）

あまり、文章が成り立ってませんね・・・。

私的に頑張って書いてみたつもりなんですけど・・・。

今回も自己満足です！

次回は、奈津美・良介達が病院に行き、最悪なことになります。

えーと愛美が人の心をよめるようになる前にちよつとハプニングがあるんです・・・。

病院！？（後編）（前書き）

愛美は、病院に運ばれたと病院から電話がきたため、愛美の母・美恵は、愛美の父・健太と愛美の友達（幼馴染）良介・奈津美に電話で伝えた。

病院！？（後編）

病院！？（後編）

数十分後

小橋宅

「お・遅れてすみません。」

「今まで、何してたの？」

今まで奈津美は泣いていたため、美恵に泣いていたとは言えるはずなく、

「ちよつとしたくをしていて……。申し訳ありませんでした。」

と奈津美は答えた。

奈津美は、ここまで時間かかる？と思っていたが、ここは触れないでおこうと思ったのか、深く追求することはなかった。そこが美恵の良い所である。

だが、奈津美には、それが逆に嫌なところでもある。

なぜなら、奈津美は人の心の中がよめるのだ。

おっと、その詳しいところはあとで分かるので、今はそこには触れないでおこう。

……。話を戻そう。

「分かったわ。じゃあ車に乗って？」

この美恵の言葉に従い、奈津美と良介は車に乗り込んだ。

美恵は、車のエンジンを入れ、いった。

「とばすわよ？2人とも何かに捕まってるね？」

キー――――！！

「（し・死ぬー！）」

「（ははは……。）」

「（いやっほーい！）」

注意

これは3人の心の中です。

通常1時間ぐらいでつくのが半分の30分でついた。

「おそかったな。」

「あ、それは「悪かったわね。ちょっと用事があった。」

奈津美は遅くなったのは自分のせいだといおうとしたが、奈津美が言う前に美恵が答えた。

「そつえば、今愛美の病室に行ってきたが……。」

「ま・愛美どうだったの!？」

「そ・それが……。」

「もったいぶらないで、早くいいなさいよ!」

「ああ。ならばつきり言わしてもらう。愛美は、愛美は記憶喪失になった」

5分ぐらい沈黙が流れた。

5分後

奈津美が泣き崩れた。

「わ、私が悪いんだ。愛美がこんなことになったのは私のせいなんだ。」

美恵は泣きそうになりながらも、冷静に聞いた。

「さ、さつきからそんなこと言ってたけど、貴方たちの間になにがあったの?」

奈津美はカラン店であつたことを美恵と健太に正直に話した。

奈津美に話を聞いたあと、2人して苦笑いをしながらいった。

「まるで、中学生のころの俺らみたいだな」

「え?」

「どういう意味ですか?」

「私も、まったく同じ経験をしたことがあるのよ。」

「え……。じゃ、じゃあ。もしかして、事故にあつたのも同じとか?」

「ええ。私も事故にあつて、愛美のようにまではいかなかったけどね。」

「も、もしかして、その親友って・・・。」

「そう、貴方の母親、奈津子よ」

「そ、そうだったんだ。」

「じゃあ、早速愛美に会いに行こうかしら。」

美恵は病院の中に入っけいこうとしたが、奈津美に捕まれた。

「まってください。私まだ怒られてません。」

「俺にも怒ってください。怒鳴っても構いません。」

奈津美と良介ははたかれるのを覚悟に頭をさげた。

だが、帰ってきた言葉は

「私たちはそんなことするつもりはないわ。」

だった。

「な、なんで？なんでですか？」

「俺たちは愛美をこんな目にあわせたんですよ？」

「貴方たちは何も悪くないわ。悪いのは、愛美をこんな目にあわせた、ひき逃げ犯よ！」

「で、でも。」

「貴方たちは悪いことをしたかもしれないわ。でも、ここで貴方たちを怒ってもなんの解決にはならないでしょ？」

それに愛美はそんなこと願ってるわけないわ。

だから貴方たちは、愛美が記憶を戻せるように、一緒に協力してくれれば十分だから。」

「は、はい！わかりました！」

「じゃ、ちよつとつらいけど、愛美にあいにいくわよ！」

「はい！」

というこで美恵、奈津美、良介、健太はランラン病院の中に入っけいっけい。

「はい！」

「はい！」

というこで美恵、奈津美、良介、健太はランラン病院の中に入っけいっけい。

ていっけい。

病院！？（後編）（後書き）

どうでしたか？

また今から続きを書くつもりですが、最終回がいまだにどついう設定にしようかきまっていけない・・・。

なるべくハッピーエンドで終わりにしようとは思っているんですが、早々終わりにはなりませんね。

最低でも15話以上はいくかも・・・。

でも、30話以上はいかないように心がけてはいるんですけどね。

最後に評価よろしく願いします！（ぺこ）

記憶を取り戻せ！（前書き）

暮矢 終之丞さんコメントありがとうございました。

とても参考になり、気をつけてやってみたものの、ちょっと難しいですね・・・。

「読む人の気持ち」を考えてやってみたんですけどどうですか？
では、前回のあらすじに入ります。

愛美は命に別状はないものの記憶喪失になってしまった。

記憶を取り戻せ！

記憶を取り戻せ！（前半）

ウィーン

奈津美、健太、良介、美恵は病院の中に入ってた。

「ねえ、健太。愛美の病室はどこなの？」

美恵は健太に聞いた。

「ああ、それは4階の308号室だ。」

「わかったわ。4階の308号室なのね」

と美恵は言ったとたん、ここは病院だということも忘れ走っていった。

それを見て、健太は

「やっぱり愛美のことが心配なんだな。」

と言つて、良介、奈津美とともに走って追った。

愛美の病室前（308号室）

美恵に追いついた、健太たちは早速中に入った。

ガチャ

「あ、どちら様ですか？」

美恵たちが中に入ったとたん、愛美が聞いた。

「わ、私よ？愛美。本当に覚えてないのね。」

やはり記憶がないと知っていながらも、本当に記憶喪失なんだと改めて知るとものすごくつらい・・・。

奈津美は前作でも言ったとおり、心の中がよめるので、そのつらさも倍増した。

「愛美相手にいまさら自己紹介するのちよつといやだけど、まず自己紹介しませんか？」

と良介が名案を出した。

「そうね。まず私からするわね。私は貴方の母親の小橋 美恵よ。」

「お、お母さん？」

「ええ。おもいだせそう？」

「すいません。まだ全然」

「そう。じゃあ次健太お願い。」

「ああ。俺は、愛美の父親の小橋 健太だ」

「お、とうさん」

「ああ。そうだ」

「次、お、俺でもいいですか？」

「いいわよ？」

「俺は、お前の幼馴染の西崎 良介だ。」

「りよ、良介君？」

ドクン

「きゃ――――！！」

突然愛美は苦しみだした。

「ど、どうしたの？愛美！！」

「あ、頭が、頭がいたい！！」

「頭が痛いんだな？」

「う、うん」

「美恵！！お医者さんと呼んできてくれ！」

「わ、分かったわ！」

ガチャ、ばたん、タタタタ

美恵が病室から出て行った。

数分後

医者と美恵が愛美の病室に入ってきた。

そして、医者は真奈美の様子を見て言った。

「もう、娘さんは大丈夫です。ですが、記憶はまだ戻りそうもありませんね」

「そうですか。」

「ですが、娘さんは良介君といいましたか、その子の名前をきいて

なったんですよ？」

「はい！」

「なら、今日言ったところを連れて行ったら、娘さん愛美さんの記憶は元に戻るかもしれません。」

「まだ希望がなくなっただけでは、ありませんよ。」

「ほんとですか？」

「ええ。」

「じゃあ、今から連れて行きます！」

「あ！でも、今日は連れってっちゃいけません！」

「な、なんでですか？」

不安そうに良介が聞いた。

「今連れて行ったら、また頭が痛くなってしまうですよ。」

「な、なぜですか？」

「さっきので、相当なダメージが真奈美さんにおこっています。」

ですから、また同じことをしたら間違いなく真奈美さんは倒れるでしょう。」

「い、いつ頃ならいいんですか？」

「そうですね。この調子なら明日ぐらいなら大丈夫でしょう。」

「わかりました。」

美恵は安心したように言った。

「では、私は出て行きますね。」

「はい。先生ありがとうございました。」

「いえいえ。それが私たちの仕事ですから。」

そう言つて、医者は出て行つた。

「さーで、良介君の自己紹介はしたけど、まだ奈津美ちゃんの自己紹介が終わっていなかったね。」

「はい、でも真奈美が記憶なくしたのも私のせいでもあるし、また愛美頭が痛くなっちゃうんじゃないんですか？」

「大丈夫さ。良介君は特別なんだ。」

「（愛美のお父さんも、愛美が良介君のことが好きだってこと知っ

てたんだ。」

「なら、私が自己紹介しても大丈夫ですね。」

「ああ。心配しなくても大丈夫だ。」

「わかりました。」

奈津美は愛美の方を向いていった。

「私は、私は・・・・・・・・・・・・・・・・。」

奈津美が急にうつむいた。

「ど、どうしたの？奈津美ちゃん」

うつむいてる、奈津美に美恵は心配して、奈津美の顔をのぞき込んだ。

ここでやっと、美恵たちは奈津美が泣いていることに気付いた。

「どうしたの？」

美恵が心配そうにきいた。

「も、もしかして私何かしちゃいましたか？」

愛美も奈津美が泣いてるのに気づき、奈津美に聞いた。

「うつん。愛美は悪くない。ど、どうしても愛美が記憶喪失になってるんだな。っておもったら、なんか胸が苦しくなっちゃって、どこかで愛美が記憶牛なってるの、拒否したかったのかもしれない。」

奈津美は首を振りながら言った。

すると、奈津美は何かを決心したように、泣くのをやめて、愛美のほうをみた。

「でも、そんなことじゃ、だめだよね！」

私の、自己紹介はじめるね！

私は、愛美のし、親友の鈴木 奈津美だよ！」

「な、奈津美ちゃん？」

「ええ」

すると愛美の目が急に優しくなり、

「わ、私、思い出せそう！」

「「「「え！」「「「「」

「うん！もう少しで思い出せそう！」

「ゆ、ゆっくり思い出すのよ?」

「はい!」

数十秒後

ばた

再び、愛美が倒れてしまった。

「え!?!」

あまりにも急に倒れたので、美恵たちはびっくりして数分間声が出せないでいた・・・。

記憶を取り戻せ！（後書き）

どうでしたか？

「読む人の気持ち」を考えて、やってみたつもりです！！

ほかに、ここは気をつけた方がいい。などというような意見がありましたら、コメントなどでお知らせください！

では！

また次回まで！

さようなら！

愛美の能力

「とりあえず、これから脳の検査をするので…」

「そうですか…」

良介はしゅんと肩を落とした。

「どうしよう…愛美が助からなかったら…あたし…あたし…」

奈津美は涙をこらえきれなくなり、顔をおおって泣き始めた。

「…奈津美…」

良介は奈津美の肩に手をおく。

だが、奈津美は顔をおおったまま、病室を飛び出した。

「奈津美！」

「…そつか…一番つらいのは愛美の親友の奈津美だよな…」

良介は人工呼吸器をつけたガラス越しの愛美をじっとみつめた。

「愛美っ…！」

良介は何も出来ない自分を悔やみ、ガラスを「ガンッ！」とたたいた。

「あなた…」

美恵は健太にすがりつく。

CTに入れられた愛美をガラス越しに良介、美恵、奈津美、健太はじっと祈るように見つめた。

そして医者から結果を伝えられた。

「どうなんですか！愛美は！」

良介は医者に言う。

「…なんともいえませんね…ただ…彼女の体の中には…何かが変化をとげているようで…おそらく愛美さんはその体の中の変化の衝撃によって倒れたんでしょう。そのため、しばらく眠りについてい

るようです。ですが、命には別状はありませんな。」

「よかった…」

「ああ…」

良介は胸をなでおろし、美恵と健太はお互いを抱き合った。

ところがその中で、良介は奈津美の変化に気付いた。

奈津美はじつと人工呼吸器をつけた愛美を見つめて何かを考えているようだった…

「…奈津…美…？」

奈津美は泣きながら医者に言った。

「…先っ…生…ありがとうございます…本当にありがとうございます…」

「愛美…絶対に治ってね…治ってまた一緒に遊ぼうね…」

その姿を良介と美恵と健太は笑顔で見守っていた。

「じゃあ、今日はありがとうございます。」

「いえいえ、こちらこそ…あっ！そうだ。できれば、家まで送っていこうか？」

美恵と健太は二人に言った。だが奈津美は…

「いえ…私はしばらくここにいます。愛美が目を開けるまで…最後まで親友として見守っていてあげたいから…」

「そっか…じゃあ、気をつけてな…」

良介は奈津美に言った。

「うん。良介も愛美が治ったら…愛美と…クスッ！」

「な、なんだよ。」

良介は顔を赤くしていった。

「ハハハ…じゃあ、帰ろうか。」

そういつて健太と美恵と良介は帰って行った。

良介たちが帰っていった後…

「…選ばれしエスパー…か…」

なぜかガラスを抜けた奈津美の姿があった。

「やっほーね……」

愛美の能力（後書き）

おひさしぶりです！

事実（前書き）

こんばんわ!!

お久しぶりです!!

出来たんで、よかったら見てください。

事実

事実

「うん。」

ただいま、午後10時45分

真奈美は病院のベッドの上で、目を覚ました。

「あれ？ここは？」

真奈美は目をきよろきよろさせながら一瞬考えた。

すると思ひ出したようにいった。

「あ！そうか。私事故にあっただけ？」

そして動こうとしたら、なにか足に当たる感覚があった。

「ん？」

真奈美は、目をそこに向けたら、

「あ！奈津美！」

そう。看病に疲れた奈津美が気持ちよさそうに寝ていたのだ。

「うん。あ、起きたんだ。真奈美。そうか、まだ記憶ないんだっけ？」

一瞬真奈美は考えるようになしぐさをしたが、

「ほえ？記憶が無い？何いってんのよ。奈津美。私がいつ記憶なかったのよ。」

さも当然のように、真奈美はいった。

そう。記憶は取り戻せたが、記憶を失ったときの記憶はさっぱりなくなっているのである。

「（そうか、真奈美は記憶を失くしたときの記憶がないんだ・・・）

すると

「ん？奈津美なんか言った？」

「へ？なんも言っていないよ？・・・やっぱりもしかして・・・」

一瞬奈津美は考えるしぐさをした後、何か心あたりのあるようにいった。

「（ねえ、真奈美聞こえる？）」

「うん。聞こえるよ。」

この場面では、あまり分からないかもしれないが、勘のいい人はお分かりのように、真奈美は奈津美の考え（心）をよんだのである。

「やっぱりね。」

「やっぱりって？」

真奈美は、奈津美の言ってる意味がさっぱりわからないというように、必死に首を捻りながら考え込んだ。

「あのね、真奈美。真剣に聞いてね。」

「うん。」

やはり、真奈美は答えが出なかったのか、奈津美が言い出すのをじっと待った。

数分の沈黙が流れた。

そんななか、奈津美は決心がついたのか、慎重にいった。

「真奈美は、今回の事故で人の心が読めるようになったのよ。」

奈津美の口調は優しくかったが、真奈美を愕然とさせるほどの言葉だった。

「人の心が読めるって・・・。」

「そう。他の人が考えてることが分かるの。」

普通は信じられないことだけど、これが現実・・・。

ゆっくりで、いいからこの現実を受け止めていってね・・・。」

まだ、真奈美は信じられないというような顔で、愕然としている。

「ねえ、これって直るの？」

真奈美は、少しは脅えつつも、前を向いていこうと思ったのか、奈津美に質問した。

「いいえ。直らないわ・・・。」

もう、大丈夫？真奈美。無理しなくていいんだよ。」

「ええ、大丈夫。それよりも、奈津美も同じ状況に陥ってるんですよ？」

真奈美の言葉に、今度は奈津美が愕然となった。

「な、なんでわかったの？」

「だって、普通心が読めるようになるなんて、SFじゃない？」

なのに、直ぐに奈津美はそう判断した。ってことは、言った本人が同じ状況に陥ってるか、

もしくは、友達に経験した人がいるってことでしょ？

友達の仮説もあったけど、そんなこと普通人には相談しない。

だって、そんなこといったら、気持わるがられるじゃない？

だから、その仮説はなし。

ってことは、最終的に残るのは奈津美本人が能力者。

どう？はずれてるとこある？」

奈津美は呆然としながら聞いてたので、急に問われて多少驚きながらも、答えた。

「いいえ。全部当たってるわ。私も真奈美には話そう、話そうと思ってただけど、なかなか言い出せなくて・・・。」

真奈美に嫌われたくなかったから・・・。」

「ううん。大丈夫。私だって、こんなこと奈津美が知らなかったら、たぶん言ってなかったと思う。」

二人は友情を確かめ合ったそのとき、

ばーん！！

急に病室に銃撃がきた。

「な、なに！？」

すると外の窓から人が入り込んできた。

「選ばれし、エスパーは私一人で十分だ。」

事実（後書き）

どうでしたか？

文を書くにしても、最近この小説に手がけてなかったんで、自分で覚えてる限り頑張って書いたんですが・・・。
よかったら、コメントください。

ここが読みづらいや、ここがだめなどでもいいので・・・。

選ばれしエスパー（前書き）

記憶が直った真奈美だが…。

選ばれしエスパー

選ばれしエスパー

「選ばれしエスパーは私一人で十分だ。」

勝手に、部屋に入り込んできた人が暗い声で言った。

「だ、誰!？」

「………美花理……。」みかり

「え？奈津美知ってるの？この人……。」

「久しぶりだな。奈津美……。随分探したんだぞ。」

奈津美はその言葉を聞くなり、一層震えだした。

「どうしたんだ？」

そんなに怖がらなくてもいいじゃん。

ただ、直ぐに楽になるだけなんだから。」

すると、美花理とよばれた女は、スツと拳銃を奈津美に突き出した。

「な、なんなの!？あなた!！」

「フツ。あんたも選ばれしエスパーだったな。」

「だから、選ばれしエスパーってなんなのよ!！」

「あ、真奈美あまりその人を刺激しないで……。。」

「な、なんで？悪い人なんだよ？」

すると

どたどたどたどた

さっきの銃撃を聞いたのか、廊下から足音が聞こえた。

「チツ。邪魔が入ったか……。まあ、少し命が延びただけだ。

その間に奈津美に事情を聞いておくんだな。」

そういつて、美花理と呼ばれた女は窓から飛び出していつてしまった。

「あの人なんなの！？ねえ、奈津美！！」

と言つて、真奈美が奈津美の肩を揺らしたそのとき

ガチャ

「大丈夫！？。真奈美、奈津美ちゃん。」

理恵が、ドアを開けて飛び出してきた。

真奈美の見舞いをしようとして、病院に来たときに例の銃声が鳴つたこのことらしい。

「うん。大丈夫だよ。お母さん。」

「ま、真奈美あなた……。」

「ええ、真奈美記憶が戻つたんですよ。」

突然直つたとの連絡を受け、理恵は多少驚きを見せたが、そのうち安心したように泣いてしまった。

「ちよ、ちよつと。お母さん。今奈津美がいるんだよ。」

「で、でも……。」

といつて、理恵はもつと号泣してしまった。

「真奈美。私このこと誰にも言わないから、もう少し泣かせてあげなよ。」

そのくらい、おば様が真奈美のこと心配してたつて、ことでしょ？」

と奈津美が言つたので、仕方なく真奈美はもう少し泣かせておくことにした。

数分後

「あゝ。すっきりした。」

そろそろ、健太や良介君に知らせないと本気で私怒られちゃうわ。

「

といつて美恵は病室から去つていった。

「つてことで、さっきの騒動の成り行きを話してくれない？」

選ばれしエスパーってなんなの？

あのひとはだれなの？」

美恵が帰ったことで、溜まっていたことを真奈美ははきだした。すると、奈津美は立って、カーテンのところで、話し始めた。

「まず、選ばれしエスパーってどこから話すわね。

選ばれしエスパーってゆうのは、世界で、たった4人だけなれるエスパーってことなの・・・。

そのエスパーは全員が協力し、今の世界を平和にする役目があるの。

でも、もう一人は正体不明、二人目は真奈美、三人目は・・・。

「さっきの美花理って女の人ね。」

「ええ」

「でもなんで？みんなで、協力しなくちゃいけないんでしょ？

美花理って人はなんで、私たちの命をねらうの？」

「さっき言ってたことを聞いていたのなら、分かると思うけど。

美花理は、美花理のほかにいる私たちエスパーを殺して、一人だけ手柄を取ろうとの考えなんだわ。」

「卑怯そのものね・・・。」

「ええ。」

と言って、座り込んだ。

「でも、手柄を独り占めして、なにになるの？」

「この世界を平和にできれば、願いをひとつだけ聞いてもらえることができるの。」

「だれに？」

「この国の王子様・・・。」

「王子様？天皇とか総理大臣とかなら知ってるけど・・・。王子様ってなんか時代遅れじゃない？」

「ええ。この話を私と美花理は信じられなかった。

しかし、この前何かの光に引き込まれ、ついて行ったらそこは夢の国のような場所だった。」

「夢の国？」

「そう。夢の国。それからよ。あの話は本当だったんだ。と美花理が私の命を狙いはじめたのは……。」

あんなに仲の良かったのにと奈津美は齒をくいしばった。

すると急に真奈美は泣き出した。

「な、なんで、真奈美泣くの？」

奈津美はうるたえながら言った。

「だ、だって。そんなことに奈津美が巻き込まれてたなんて、全然知らなくて……。」

「なんだ……。そんなこと、気にしなくていいのに……。私が教えてなかったんだから真奈美は知らなくて当然でしょ？」

といって、奈津美は真奈美のことを抱きしめた。

「で、でも……。」

「いいの。私のこと少しでも思ってくれているのなら、私と一緒にもう一人のエスパーを探して、美花理に勝ちましょう？」

すると、急に真奈美は笑顔になり、

「うん!!!」

と元氣良く返事をした。

選ばれしエスパー（後書き）

本当にお久しぶりです。

も。本当に最近忙しくて・・・。

なんせ、今受験生真っ盛りですから。

次の投稿いつになるか分かりませんね…。

なんか、またココが変もしくはココをこつしたほうがいいなど、
どんどん教えてください！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1065b/>

人の心の中がよめちゃう！？

2010年10月12日13時27分発行